



## 大根小説①「まりあの日記」... 1～3話～他2話

---

『お母様の6人目のHフレンド』～～～作／音川伊奈利

私のお母様は、  
まだ男を5人しか知らないといつもこぼしています。

そして、まりあに、  
「まりあ、お前まだ高校生なのに  
男を10人も知っているのは異常ではないかい？  
あ～うらやましい」  
といつもほざかれています。

私も頭にきて、  
「あら、お母様、健二か卓也ならお貸ししますよ！」  
というとお母様は、  
「まりあ、どうせなら、家庭教師の星野さんを貸してくれないかい？」

私もお母様には生まれて16年間育ててもらった恩義もあるし...  
そこで、星野さんを親子で共有することになりました。

星野さんは東京大学の法学部の学生で、  
毎週月曜日の夕方5時にきます。  
そしてその日が来ました。

星野はまりあの部屋に入るなりキスを求めてきた。  
まりあは、それをストップさせて、  
「星野さん、まりあのお母様のことどう思っているの？」  
「お、お母様はとても素敵です。黒木瞳さんに似ている！ファンです」  
「そう、それならお話は早いわ。  
たしか、星野さんの家庭教師料は2時間で5000円でしたネ。  
それを、まりあが1時間お母様が1時間という時間割にしていただけませんか？」  
「はあ～お母様に何を教えるのですか～」  
「それはなんでもいいの、  
それを承知していただけるのなら2時間で6000円に値上げします」  
「はい、ありがとうございます。喜んで！」

まりあは商談成立したのを確認してから星野をベッドに誘った。  
星野はまりあの身体を隅々まで口と舌で愛撫している。

そのころお母様は、シャワーを浴びてからまりあの  
セクシーランジェリーを借りて何を着ようかと  
ルンルン～気分で品定めをしていた。

そして1時間程度にお母様はまりあの部屋をノックしていた。  
まりあはパンツ一枚でドアを開けて  
お母様を招き入れた。

星野はまりあのベッドで煙草を吸っていたが、  
お母様のセクシーランジェリーを見て目を点にしていた。

まりあは、星野先生に  
「はい、お母様の家庭教師もよろしくと丁寧に頭を下げている」

星野はもらったばかりの6000円をポケットに入れて  
帰りのバスをバス停でまっていたが...  
「うん？なんか儲かったような損をしたような...」

そのころまりあ母子は食事をしながら、  
「まりあ、最高の親孝行をありがとう」  
「お母様、もうこれでホストクラブにいかなくてもよろしいですわ...」  
「そう、たった3000円で、東大生の若いエキスを～おっほほほ」  
「まあ～お母様、なんてお下品な～おっほほほ」

(つづく)

★～ある日、制服姿の高校生のカップルを私のタクシーに乗せた。行き先は堂々と「京都南インターのラブホテル」と告げたが、これを制止する法律も権限も私にはない。それを感じたのか女の子が「運転手さん、私達昼間のサービスタイム5時間3000円ポッキリの部屋で先輩に勉強を教えてください」と...そこで私も負けずに「そう～なんの勉強？」と切りかえしたら、「そら～まじめな学校の勉強と社会勉強」とぬかしやがった！。

★～まあ～高校生だからといってセックスをしてはいけないなんていうのも今時ナンセンスといわれるが...どうか病気と妊娠だけは注意してください。ぐらいしかいえないのね～(伊奈利)

私のお母様は、

自分で男を物色しないで「まりあ」のボーイフレンドばかりを狙っています。

そして、まりあに、

「まりあ、今度の学校の若い先生...ほれ...」

「ああ～吉川先生...あれはお母様ダメよ！」

「ど、どうして、イケ面の体育教師で太股の筋肉と前のモッコリがセクシーじゃないの？」

お母様、今日は『性に関する調査』というのがあるってそのアンケートに「オナニーはしていますか？YES・NO」があったの。

「へえ～まりあの学校はススデいるね～そ、それで？」

「それで、吉川先生にオナニーってなんですかと聞いたの」

「そ、そしたら...な、なんて...」

先生、真っ赤な顔をして...蚊の鳴くような声で、

「...自分ですること...」

まりあは良く聞こえなかったの、

「先生、何をするんですか？自分で...どうするんですか？と聞いたの」

「そ、そしたら、イケ面教師はなんて...」

「黙っていたの～そしたら男子生徒が」

「先生、先生はオナニーしていますか？俺らは毎日です」

「いや～先生は、...していない...」

「へえ～先生は女にモテるんや～もう何人とやったの～先生！」

「いや～俺は...まだ独身だし...」

「へえ～まさか！先生、童貞？～俺らのクラスの男子は全員童貞なんてとっくに捨てたんやで...」

「そ、そしたらまりあ、先生は？」

お母様、先生そのまま教室から飛び出して午後の授業はお休み！校長や教頭先生が吉川先生を探していたけど～明日もたぶんこないのよ～お母様。

「そう～もう30前になって童貞なんて汚いよね～まりあ」

「そう、高校生なら可愛いけど～お母様」

「その高校生の童貞もまりあに紹介してもらって3名だったかな？まりあの他のクラスの男の子いないの？」

「そんなん、他のクラスの男を誘惑したらそのクラスの女番町に袋叩きにされるわ～お母様～」

もう、あきらめてね！」

「まりあ～他の学校に転校しない？」

「もう～お母様～ほら、もうすぐ家庭教師の星野さんがくるから我慢しなさい」

「はいはい、まりあ...今日は先にいただいていいの～？」

「はい～あいにくまりあは月のものが...」

「あら！ラッキー！」

★～という微笑ましい母娘の会話でした。

ちなみに「まりあ」は東京大学の法学部の受験生で一発合格は保証されているような賢い娘です。。。

～まりあの日記～「朝まで3回イカします～」

まりあとお母様は何でもお話ができるフレンドなのです。いつも夕飯時はテレビを消して親子のコミュニケーションを大事にしています。今夜も、

「まりあ、次の日曜日ぐらいに一人で京都に行ってもいい...」

「あら、お一人で...めずらしいこと！また男ができたの？お母様」

「なによ～まりあの東大受験が成功しますようにと京都の北野天満宮にお札を貰いにいくのよ～親ごころよ～まりあ～」

「おほほほほ...お、お母様、いつからまりあに隠し事をされるようになったのですか～お～ほほほ」

「あら！わかるのまりあ？実はネ！パソコンの掲示板で京都の中年の「イナリ」さんという人とお知り合いになって...」

「うふふ。。。お母様は高校生とか大学生専門でなかったの？それがおじさま～変ね～お母様」

「そら～若い男のほうが...でも...」

「でも？な～に～お母様」

お母様は夕飯のお片づけもしないで、まりあをお母様の寝室に手招きされたの...。まりあのパソコンとお母様のパソコンは別々でお母様がどんな掲示板やチャットで遊んでいるかは知らなかったの。

お母様は手馴れた手つきで掲示板を開けてまりあに読めとっている。そこにはイナリさんが、

「まりあ様、一度京都の秋は最高ですから遊びにきてください。イナリはHにはものすごく自信がありますからまりあ様を朝まで喜ばします。まずオッパイを20分、まりあ様の秘部を30分それぞれ指と口の愛撫で満足させます。そしてペニスを挿入してから30分は荒々しいピストン運動をいたします。もしよろしければこれを朝まで3回まではいけます」

お母様、この「まりあ」っていうのはお母様のHNなの？

「まりあ、可愛いHNでしょう？」

「もう～どうして私の名前を！そ、それで？」

「えっ！それだけだよ～まりあ、もうこれを1ヶ月も毎日誘惑されているの～それで...なんか悪いと思って...」

「でっ！お母様は何歳にしているの？」

「私は、28歳の東京丸ビルのキャリアウーマン」

「まあ～お母様～お若い！」

「まりあ...若い男の子はこのイナリさんのように挿入して30分ももたないのよ～ほら、こないだまりあの家庭教師の星野さん、あの人なんて3分ももたないのよ～それに比べたらイナリさんは～うふふ。。。」

「でもお母様、こんな掲示板はウソばっかしよ！」

「でも...もし本当だったら一生の不覚よ～まりあ～」

そこでまりあが同じHNでそれを確かめようと掲示板に、

「イナリさま、では今週の土曜日の夕方新幹線で京都に伺います。ホテルは都ホテルのスイートルームを予約いたします。もちろん費用はこちらですべて持たせていただきます。そこで約束していただきたいのですが、愛撫を合計50分、イナリさまのペニスがまりあの中に30分滞在させてくださることは間違いはございませんか？お返事は今夜中にお願いいたします」

というカキコをしていた。まりあとお母様はその返事を心から待っていたが深夜の2時になっても返事はなかった。そしてあくる日の朝、イナリの掲示板は消滅していた。

ネ～お母様、あのイナリは口ばっかしよ！これからは掲示板なんて信用してはいけないのよ！お母様！」

お母様は下を向いたまま一言、

「まりあ...家庭教師の星野さん、また貸してくれる？」

「はいはい、なんならお母様にあげてもよ～」

「まりあ～ラッキー！」

(おわります)

★～まあ～掲示板ならウソとはいわないがなんでも好きなことが書けます。夢や希望を語るのもいいし～たまにはグチを書きたくもなります。↑の小説のようなカキコはないが私も掲示板を一つ持っています～よろしければ遊びにきてください～♪

<http://bbs.teacup.com/?parent=hobby&cat=1810&topics=10696>

★～小さな夏ちゃんの物語

★～小さな圭ちゃんの物語

・・・悩み・・・

・・・夏野 夏・・・

小さい夏ちゃんが公園から帰ると、

「お帰りー夏ちゃん、冷蔵庫にスイカがあるよ。  
ちゃんと手を洗ってね。」

ってママが言いました。

「はい。」

夏ちゃんは手を洗って、冷蔵庫からスイカを出しました。

台所のテーブルのところに持って行って、  
どっこいしょと椅子に座り、  
夏ちゃんは、スイカを食べ始めました。

「美味しい？田舎のおばあちゃんが、送ってくれたスイカだよ。」

夏ちゃんの、おいしそうな食べ方を見て、  
ママは幸せな気分になりました。  
手に持っていたペンと、電卓を置いて、  
家計簿をパタンと閉じました。

そして、

「夏ちゃんは、いいねえー。  
夏ちゃんには、悩みなんてないでしょー!？」

と、思わず言ってしまいました。

「え？悩みって？悩みってなあに？」

「悩み、って、困ったことよ。」

「え、夏ちゃんにも、困ったことあるよ。悩み、あるよ。」

夏ちゃんの思いがけない言葉に、ママは、え？っと思いました。  
幼稚園で、何か、問題があるのかしら。

「な、夏ちゃん、悩みって？困ったことって？  
マ、ママにお話してみてもいいよ。」

「夏ちゃんねー、幼稚園で、水筒のふたが開けられないの。  
開けられないと困っちゃうの。お茶が飲めないの。」

小さい夏ちゃんの水筒は、お姉ちゃんのお古でした。  
栓がきついのは、洗うときにママも気づいていました。  
明日、新しいのを、買って上げましょう。

でも、夏ちゃん・・・  
貴女の悩みはまだそんなものなのかい。

ママは、ふーっとため息をつきました。

・・・銀の鈴・・・

・・・音川伊奈利・・・

圭ちゃんは、お父さんから幼稚園の入園のお祝いにもらった銀の鈴がついたキーホルダーが、  
よっぽど気に入ったのか幼稚園の小さなショルダーバックに留めて毎日歩いて10分のくるみ幼  
稚園まで、「チャラ、チャラ、チャラ、チャラ」鈴の音をさして通園していました。

やがてその鈴の音が聞こえると、「あ！圭ちゃんだ・・・」といって近所の人が家から飛び出  
して「圭ちゃん、おはよ〜」「圭ちゃん、おかえり〜」と声をかけてくれます。そのつど圭ち  
ゃん、明るい笑顔でパパからもらった鈴を自慢して鳴らすようになりました。

その圭ちゃんの誕生日に今度はおばあちゃんから金の鈴がついたキーホルダーがプレゼントさ  
れて二つになりました。それから圭ちゃんにはキーホルダーが喜ぶといろんな人からプレゼント  
されてもう30個にもなっていました。そして音も「チャラ、チャラ」から「ガチャ！ガチャ！  
」とやかましいぐらいになったのでお母さんが、

「圭ちゃん、もう〜そんなにたくさん重いから気にいったのだけにすれば？」

「ママ〜ダメダメ、だって〜これ全部気に入っているもの〜」

「でも〜重いでしょう？」

「ううん〜ほらこの金の鈴はおばあちゃん、パンダは田中さんっちのおばさん、ミッキーは新ち  
ゃんから、これは〜親戚の〜」

「け、圭ちゃん、わかったわかった。でも〜パパからもらった銀の鈴は？」

「ママ〜へへへ〜ないの〜」



「へへへってなによ～もう気色悪い圭ちゃん！」

「あれ～夏ちゃんの誕生日にあげたの～ママ」

「な、夏ちゃん？夏ちゃんって年長組みの夏ちゃんに？だって圭ちゃんよりお姉さんよ！いや～それはいいんだけど～・・・」

その夜、圭ちゃんのパパはママにこのことを報告しています。

パパは、

「へエ～圭にも好きな女の子が、アッハッハッ、さすが俺の息子だ！」

「パ、パパ！何をニヤついているの？」

「だってママ、俺の最初のプレゼントをもう忘れたのか？」

ママはハッとしました。そうです、パパと付き合ってから最初の誕生日のプレゼントが銀の鈴がついたブローチだったのです、そしてママはパパより一つ年上だったのです。

★～いつもHなお話を書いている夏野夏が小さな子供を題材にしたものを書いてきた。またいずれここで発表するが、自分の子育ての中の経験から「ふと、可愛い」と思ったしぐさや言葉を素直に書いている作品が多くあります。文章を書く、または作家というのはこの「ふと感じたこと」をこのブログに定着させることだということをお話してくれています。

★～私もこの夏野夏の作品を読んで、私の子供の小さいときはどなんしぐさやお話をしてたかということをお話して書いたのがこの作品になります。もし私が夏の作品を読んでいなかったら私もこんな可愛い文章なんてものは一生書けなかった。

★～またこの作品を読んだ人が、「そうやねん、私もそんな可愛い経験」があると思っただけならこれも楽しいものです。そしてこのように人様に読んでいただく作品として投稿していただければまたブログ作家が一人誕生したことになります。もしここに作品を掲載したい人がいましたらメールで作品を送ってください。そしてペンネームを決めてください。これは検索されますからなるべく真剣に考えてほしいものです。私が「そうだ！作家になろう」と思って最初にしたことはこのペンネームを考えたことです。（伊奈利）[kyotoinari@ex.biwa.ne.jp](mailto:kyotoinari@ex.biwa.ne.jp)

★～私の小説で自己破産をテーマにしているのがあります。これは主人公を女性にしていますから少しH系ですが、自己破産までの流れが書いてありますから参考になります。とりあえずは裁判所に走りこめば今月からの返済はストップできますから自殺というような最悪のことはなくなります。ぜひ、読んでください。

長編小説「京都フラワーランジェリー物語」

<http://p.booklog.jp/book/16636>

小説「天使の恋」～7人の天使の恋の物語

<http://p.booklog.jp/book/16980>

短編小説100連発

<http://p.booklog.jp/book/16691>

